

## 太平記を歩く（護良親王編） 附・護良親王は生きていた？

原田 信作

### はじめに

四年前に発表の「太平記を歩く（楠公編）」に続いて、今回、同じく南朝の「悲劇の親王・護良親王」のゆかりの地を巡り、その生き様に思いを馳せた。また、「太平記」記載の悲惨な死の為に、各地に伝わる「伝説」についても紹介したい。

なお、「大塔宮護良親王」の「よみ」について、我々戦中派は「だいとうのみやもりながしんのう」と習ってきたが、近年「おおとうのみやもりよししんのう」と読むのが歴史家の主流となっているので、本書では後者で統一することとする。

### 後醍醐帝謀反

鎌倉幕府の時の執権北条高時は、政道正しからず、まさに幕府の崩壊を招こうとしていた。ここに第九十五代（現在では第九十六代）後醍醐天皇は、幕府を倒し、公家政権の回復を企てるが、計画が露見し、関係者が処分された。（正中の変）しかし、その後も天皇とその側近による討幕と王政復古の志は挫けなかった。東大寺、興福寺、比叡山などに行幸し、それぞれの武力（僧兵）を一朝事ある時味方にすべく画策された。中でも比叡山延暦寺の座主大塔宮尊雲法親王（護良親王）は武技にも秀で、天皇の最も信頼される皇子であった。「太平記」巻第二にも「天台座主始まって、未だ斯かる不思議の門主は御座しませず。後に思い合わせるにこそ、東夷征罰の為に、御身を習わされける武芸の道とは知られたれ」とある。

護良親王は後醍醐天皇の第三皇子として延慶元年（1308）に誕生。十一歳で比叡山延暦寺に入り、二十歳より天台座主（第116、118世）を務め、尊雲と号した。比叡山東塔の大塔だいとうに在したことから大塔宮と称された。

天皇らのこの動向も鎌倉の知るところとなり、「主上を遠国へ移し、大塔宮を死罪にせよ」と六波羅に指示した。これを察知した大塔宮は天皇に使いを立て、「急ぎ南都へお忍びあれ。また、近臣の一人を天皇になりすまして叡山へ行幸させられたい」と伝えさせた。案の定、元弘元年（1331）八月、六波羅勢は畿内五箇国の勢を差し添えて唐崎に寄せかけた。これを主上の臨幸を迎えたと信じて士気揚がる叡山の衆が奮戦撃退した。（元弘の乱）



比叡山東塔の大塔

この間に、天皇は南都へ、そして笠置へと行幸された。ところが、そのうち尹大納言いん師賢もろかた扮する偽天皇が露顕し、叡山の衆は一夜にして戦意を喪失するし、一方、幕軍は叡山を捨てて笠置へ向かっ

た。大塔宮は十津川の奥へと志して、先ず南都へ落ちた。

笠置の城は少数ながらよく持ちこたえたが、関東を含む幕軍の大軍に抗しえず、九月に落城した。天皇らは楠木正成の河内赤坂さして脱出したが、途中幕軍の手に捕らえられた。元弘二年(1332)三月、後醍醐は隠岐へ流罪に処せられた。

大塔宮は、笠置山の状況を知るために、しばらく南都の般若寺に忍んでいたが、笠置が落城し後醍醐の逮捕を伝え聞き、いよいよ身に危険が迫ってきたことを察知した。そのころ、興福寺の僧が大塔宮の居所を突き止め、五百余騎を率いて般若寺に押し寄せてきた。

般若寺は奈良東大寺の北にあって、飛鳥時代の創建で、奈良時代に聖武天皇が平城京の鬼門鎮護の為「大般若経」六百巻を地中に納め伽藍を整え「般若寺」と命名した寺である。



飛鳥時代の創建と伝えられる般若寺



大塔宮護良親王供養塔

平安末期、平重衡による南都焼き討ちで伽藍焼失。鎌倉時代に十三重石宝塔の建立と共に七堂伽藍が復興されるが、室町時代・戦国時代の兵火により重要伽藍焼失。兵火を逃れた楼門が唯一国宝として残っている。境内に「大塔宮護良親王供養塔」あり。

ここで、大塔宮は大般若経の入った唐櫃の中に隠れて難を逃れたという話は名高い。

## 大塔宮逃避行

危機を逃れた大塔宮は、赤松律師則祐、村上彦四郎義光ら九名の供のみで南都を脱出、山伏姿になって熊野を目指した。由良から藤代、切目王子と紀伊路を辿るうち、大塔宮に夢のお告げがあり、「熊野三山では今なお鎌倉方か天皇方かの統一ができていない。これより十津川に行き、しばらく時期の来るのを待たれよ」という。これ熊野権現のお告げなりと秘境の十津川を目指した。三十余里の間は人里もなく、山路はいよいよ険しくなり、一同飢えと疲れに悩まされながら、ようやく十津川郷殿野に辿り着く。一行の中の光林房玄尊が、土地の有力者とおぼしき戸野兵衛の家に行ってみるとおりしも兵衛の妻が物の怪に憑かれて悩んでいる最中で、祈祷のできる山伏を捜しているところであった。これよき折と光林房は、大塔宮の身分を明かさず、効験第一の山伏との触れ込みで、兵衛の家に連れて行く。宮が病床に臨んで祈祷をするとたちまち女房は平癒した。夫の兵衛は大いに喜び一同にしばしの逗留を進めた。しばらく滞在するうち、戸野兵衛が大塔宮に心を寄せる人物と分かり、初めて身分を明かしたので、兵衛は大いに驚き、かつ喜び、大塔宮の為に黒木の御所を立て、四方の警戒を厳にして一同を保護した。兵衛の叔父で十津川の有力者竹原八郎入道もその由を聞き、更に安全な辻堂の自分の館に一同を迎え入れた。ここで大塔宮は還俗し護良親王となって、入道の息女をおそば近くへ召されて半年ばかりを過ごした。

この殿野、辻堂の地は、当時は十津川郷に属していたが、その後紆余曲折を経て、明治二十二年四月、自治体としての奈良県吉野郡「<sup>おおとう</sup>大塔村」が成立した。この村名決定の議論の際、「大塔宮」所縁の地として「大塔」は早くから候補に挙がっていたが、その読みについて「だいとう」ではあまりに

恐れ多いとして「おおとう」となったとされている。これからも当地では当時から護良親王は「だいたうのみや」と呼ばれていたことが分かる。平成の市町村合併にて、五条市と合併し、現在は奈良県五条市大塔町となり、殿野・辻堂の字名は残されている。

JR 五条駅からタクシーで所縁の地へ向かう。通称十津川街道の国道 168 号は今でこそ大型バスもすれ違える道幅ながら、旧五条市街を抜けると次第に民家はまばらとなり、切り開いた山裾は今にも崩れそうに迫ってくる。大塔町に入ると一層その感が深く、左は山裾、右は十津川の支流天ノ川への崖という「往時は奥吉野の仙境として十津川と共に隔絶地の一となっていた」との村史の説明文が頷けた。旧大塔村役場、現五条市役所大塔支所を左折し宮谷川添いに山に入る。日光いろは坂よろしく数か所のヘヤピンカーブを繰り返して目的の寺の屋根らしきを発見する。前日五条市図書館で調べた戸野家に隣接の「西教寺」である。代々この寺の住職を務める戸野兵衛の子孫を訪ねたが、前日、寺の法要があり、今日はその檀家衆へのお礼参りとかで夕刻まで帰らないとの由。目的を説明し、本堂をお参りさせてもらった。寺は浄土真宗で本尊阿弥陀如来像を拝み、脇に立てられた「贈正五位故戸野兵衛之霊」の位牌に手を合わせる。図書館で知った「大塔宮から兵衛に下賜された太刀」並びに「兵衛の女(呉羽と伝わる)に賜った差し添えの小刀」は「当家の宝物で住職以外は出せない」と断られて残念。境内には自然石に「大塔宮御遺蹟」と刻まれた記念碑があった。

次に、役所まで戻り話を聞く。兵衛の叔父竹原八郎の墓がこの近くにあるというが、と聞くと、老所員が出てきて親切に車で竹原八郎の墓への登り口まで案内してくれた。国道を南下したところに「吉野朝忠臣竹原八郎氏墓」添え書きに「是より半町」の標石があった。初めは階段、やがて狭い山道、それも雨に濡れた落ち葉でズルズル滑りながら登る。墓は殆ど土と落ち葉に埋もれており、脇に東久世道禧(幕末急進派の公家で、長州へ追われた七卿落ちの一人)伯爵の撰になる立派な「墓碑」があった。この竹原八郎も大正六年に従四位を贈られている。

還俗して護良親王となった大塔宮は、ここで各地の有力者に令旨を発し、近辺の郷民共も次第に帰伏し勢力を蓄えていった。しかしその内、鎌倉方に心を寄せる熊野の別当定遍僧都が探索の手を伸ばし、恩賞を餌に郷民たちに宮をおびき出し、討ち取るよう命じた。一同にとってここも安住の地でなくなり、やむなく高野山を目指すこととなった。しかし、途中再三危機に遭遇し、高野山にはゆけず、吉野金峯山寺に辿り着いた。この時、宮の令旨に応じて道中にて馳せ参じたものは三千余騎になっていた。

## 吉野城合戦と落城

元弘三年(1333)正月十六日、鎌倉方二階堂道蘊どううんが六万余騎の軍勢を率いて大塔宮の籠る吉野城(愛染宝塔)へ押し寄せた。同十八日より両陣互いに矢合わせして相戦い、昼夜七日の間、激戦が続いた。ここに吉野の執行しゅぎょう(長官)で鎌倉方に与した岩菊丸が勝手知ったる地形から「大手より攻めれば死者ばかり多く城は落とし難い。後方の金峯山から攻め下る搦手と合わせ城を追い落とし、宮を生け捕るべし」と下知した。宮方の吉野の大衆だいしゆ(多数の衆徒)は前後の敵を防ぎ兼ね、敵は宮の居る蔵王堂に迫った。大塔宮今は逃れぬところと思い「錦の鎧直垂に、龍頭の兜の緒を締め、三尺五寸の小長刀を脇に挟み、劣らぬ兵二十余人前後左右に」して群がる敵陣に斬りかかる。敵は僅かの小勢に斬り立てられ、一斉に四方に散った。これを見て宮は、蔵王堂の大庭に人々を座らせ、大幕を張り、最後の酒宴を行った。宮は鎧に立った七本の矢も抜かず、頬や二の腕からの血も拭わず、大盃を三杯飲み干した、と伝



わる。そこへ防戦していた村上彦四郎義光がきて言うには「大手一ノ木戸は破られ、敵は勝ちに乗り、味方は気力を失った今、もはや守り通すこと不可能です。ここは一方の囲みを破って、ひとまず落ち延びて下さい。恐れながらお召の鎧直垂を拝領し、御名を偽り、身代わりとなって敵を欺きましょう」大塔宮は涙ながらに別れを告げ、高野山に向かって落ちてゆく。

一行を遥かに見送った義光は、大音声を揚げ「後醍醐天皇第二の皇子、一品兵部卿親王尊雲、逆臣の為に亡ぼされ、恨みを泉下に報ぜん為に、唯今自害する有様を見置きて、後の手本とせよ」と言うままに、脇腹真一文字に掻き切り、はらわた掴んで投げつけ、太刀をくわえてうっ伏した。と、「太平記」は記す。かくて、閏二月一日吉野城は陥落した。

このころ河内千早城では、楠木正成は百万余騎の大軍を千人に足りない小勢でよく防ぎ戦い、三カ月に渉る持久に成功していた。閏二月下旬、後醍醐天皇隠岐を脱出し、伯耆の豪族名和長年を訪ね船上山ふねのうえやまに籠る。五月、鎌倉方足利高氏は後醍醐の綸旨に従い変心、赤松・千種らと六波羅を亡ぼす。おなじく新田義貞鎌倉を攻め、五月二十二日幕府滅亡。同二十三日、後醍醐帝船上山を発ち、六月六日京二条の内裏へ還幸成る。これより天皇の親政始まる。

## 大塔宮信貴山に籠る

六月三日になっても大塔宮は京に入らず、大和信貴山(太平記では志貴)の毘沙門堂にあった。それを聞き付けた各地の兵が多数集まり、およそ天下の大半の勢力を結集したように見えた。天皇は、大塔宮に仏門に戻らずともよい、征夷大將軍たることを許すが高氏討伐は理由なしとして斥けた。宮は六月二十三日入洛、その行列は二十万七千余騎の軍勢、天下の壯観を尽くすと述べられている。信貴山は生駒山系の南端に位置し、南の金剛山系との間に、西の河内から東の大和に通じる道がある。JR大和路線の王寺からバスで信貴山麓ちようごそんじの「朝護孫子寺」に行く。千四百余年前、聖徳太子が物部守屋討伐の為河内に向かう途中、この山に至り、太子が戦勝祈願するや天空遙かに毘沙門天王が出現し、必勝の秘法を授かる。太子はその御加護で勝利し、自ら天王の尊像を刻み、伽藍を創建した。信ずべし貴ぶべき山「信貴山」と名付けた。寺は、醍醐天皇の御代、天皇の病が毘沙門天王に祈願で平癒したことから、朝廟安穩、守護国土、子孫長久の祈願所として「朝護孫子寺」の勅号を賜った。これより山頂を目指す。海拔僅か四百三十三メートルながらこれが大変。道はなだらかであるが、右に左にジグザグの単純な繰り返しで、曲り目ごとに小休止。そしてようやく山頂に辿り着く。南は金剛への山並みが見通せる。奈良県下では最大規模の城郭で、戦国時代には信長に背いた松永久秀が大軍を前に長期籠城した場所である。その落城後は廃城となった。尊氏の居る京を見つめる大塔宮と同じ目線で宮の心中を思い巡らせた。

## 大塔宮尊氏との確執

征夷大將軍になってからの大塔宮は粗暴の振舞いが多くなり、大乱は終わったというのに、しきりに強弓を射る者、大太刀を使う者などを召し抱え、身边にその数を増やしていった。しかもそうした連中が夜な夜な京白河で辻斬りをしたという。これというのも尊氏を討とうという宮の意図から出たものであった。

尊氏は、大塔宮のこれらの動きを聞き、後醍醐天皇の愛妃で、准后じゆごうとなっていた阿野廉子あのれんしを通じて天皇に「大塔宮は帝位を奪い奉るために諸国の兵を集めておられます。その証拠もはっきりしており

ます」と、奏聞し、宮が諸国に下した令旨を奪い取っていたものを差し出した。天皇は、逆鱗し「大塔宮を流罪にせよ」と言って、清涼殿での集まりに事よせて大塔宮を召し出された。そういう事とは知らず、大塔宮が参内したところ、結城親光と名和長年に捕らえられ、馬場殿に押し込められてしまった。諦めきれない宮は、弁明の書状を書き、天皇に上申したが、取次役の公卿が、関わり合いになるのを恐れて奏聞しなかった。やがてその身は鎌倉の足利直義の手に移され、二階堂の谷（東光寺）の土牢（格子に土を込めて一面壁にした牢）に押し込められた。南の御方という女性一人以外は付添う人はなかった。

## 大塔宮鎌倉にて生涯

建武二年（1335）七月、北条時行の乱即ち「中先代の乱」が信濃から起きた。時行は、鎌倉陥落時、北条譜代の家臣で諏訪社の神官武士諏訪氏に匿われていた。関東・北国の支持勢力を糾合して信濃で挙兵した時行の五万余騎は、鎮定軍を撃退しつつ、武蔵を経て、たちまち相模の鎌倉に迫った。鎌倉将軍府の執権足利直義は、防ぎきれないと判断し、将軍成良親王を具足し奉って、七月二十三日、鎌倉を落ちた。この時、家臣の<sup>ふちのべ</sup>淵辺伊賀守に「今は無勢の為に鎌倉を一旦立ち退くが、美濃、尾張、三河、遠江の軍勢を集めて取って返せば、時行など亡ぼすこと容易だ。当家にとって仇となるべきは兵部卿宮（大塔宮）である。急ぎ宮を刺し殺してまいれ」と命じた。淵辺は主従七騎で取って返すと、土牢の中で宮の首を掻き落とした。牢の前に出て、明るい所で首を見ると、その眼はなお生きてる人の如しであった。このような首を主（直義）には見せられないと、淵辺は傍らの藪の中へ投げ捨てて帰った。南の御方はこの有様を見て、あまりの恐ろしさに身もすくみ、足も立たなかったが、やがて心を静め、藪の中に捨てられた首を取り上げ、泣き悲しまれた。しばらくあって、理致（智）光院の長老が葬礼を営まれた。南の方はやがて髪を落とされ、京へ上られた。

以上「太平記」巻十三までで、大塔宮護良親王の記述は終わっている。



明治二年（1869）、東光寺跡に護良親王を祭神とする「鎌倉宮」が創建され、本殿裏に「太平記」に基づいて「土牢」が造られている。また、その傍らに「御首塚・御構廟」が<sup>おかまえどころ</sup>ご丁寧<sup>ご丁寧</sup>に造られている。本殿に向かって左に「南の方社」、右に「村上社」がある。

護良親王の墓は、鎌倉宮の東、理智光寺谷の小高い丘の上にある。親王もう一つの墓と南の方の墓が、大町の「妙法寺」にある。開祖は日蓮上人で、中興開山が護良親王と南の方の皇子の<sup>りょうごんまる</sup>楞嚴丸（日叡上人）である。

## 附・護良親王は生きていた？

「相模原市史」に護良親王および淵辺義博らについての三つの伝説が記されている。

その一は、**石巻伝説**で、護良親王は淵辺義博によって殺されたのではなく、義博は主君直義をだまして、親王を助け、陸奥国石巻に落ち延びさせたという親王生存の伝説である。親王は仮の御殿に住むことになったが、まもなく病にかかられ、建武二年(1335)九月崩御された。今、石巻港の後山の牧山という地に「皇子神社」という社があり、護良親王を祀る社である。

その二は、**淵野辺伝説**で、これも親王生存を伝える伝説である。淵野辺の竜像寺は、暦応年間(1338～42)の創建であるが、当時この寺の東を流れる境川の川沿いに大きな沼があり、この沼に恐ろしい毒蛇がいて人々に害を及ぼしていた。時にこの淵野辺に居館を持っていた淵辺伊賀守義博は百姓らの嘆きを見るに忍びず、強弓で毒蛇を射殺した。蛇体は三つに分かれて飛び散った。百姓らは後の祟りを恐れて、竜頭・竜胴・竜尾の三寺を建立した。竜頭・竜尾の二寺は後に廃寺となり、竜胴寺のみが残った。これが今の竜像寺である、と伝えられている。この義博は、直義の命に背き、親王をこの地に連れて来て、竜像寺の洞穴に一旦かくまった後、奥州石巻に落とした。義博主従が妻子と別れを惜しんだ橋が「わかれ橋」で、現在の「中里橋」である。また、境川の岸にある榎の古木は、義博と妻子とが縁を切った場所の榎で「縁切榎」という。現在、相模原市淵野辺本町三丁目の天野氏宅の庭に「淵辺伊賀守義博居館跡之碑」と同市文化財保護委員による碑文がある。

伝説その三は、**ひなづる伝説**である。建武二年(1335)の秋、相模から甲斐の道志村に従士七人に守られたうら若い女性が辿り着いた。中先代の乱で海道筋が通れないために、甲斐・信濃をへて、京へ帰ろうとするひなづる姫の一行であった。ひなづる姫は、大和十津川の土豪竹原八郎の女であった。(「太平記」では親王が鎌倉に幽閉されていた時、ただ一人傍にいたのは南の方(公家藤原保藤の女)である。この南の方の伝承がひなづる姫の伝説に加えられている) 姫は親王の身の上を案じて従士と共に鎌倉に来ていて、竹藪の中に捨てられていた親王の御首を拾い、従士に持たせて西上しようとしていたのである。時に姫はただならぬ身であったため、甲斐路はつらい旅であった。道志村から秋山村に入り、桜井・古福志・神野を過ぎ、無上野という部落に辿り着いた時、急に産気を催した。極寒の十二月末、付近の民家では頼めども迷惑がって家の中へ入れてもらえず、仕方なく従士らは、松の枝を折り敷いて、その上で姫にお産をさせた。寒さと疲労のため難産で、王子を分娩すると姫ははかなくこの世を去った。今日、この峠を「雛鶴峠」と呼んでいる。峠の東にひなづる姫を祀った「雛鶴神社」がある。従士七人は、王子養育のために無上野に土着し農耕にいそしんだが、不幸にもこの王子も短命であった。三、四歳であったとも、十歳ぐらいとも伝えている。

従士らが持参した親王の首は峠の西、盛里村朝日馬場の村社「石船神社」(祭神は表筒男命・うわつのおのみこと中筒男命・底筒男命)に御神体(復顔首級)として祀られている。毎年一月十五日の祭礼時に祭司交代に合わせて一般公開される。「復顔首級」とは、人の頭骸骨に箔を押し付け、梵字を墨書きし、その上に小さな木片や漆と木屑を混ぜたような塑形材で肉付けして、生きている人の頭部のように仕上げたものである。

さらに、昨年当会事務局長の横山さんが刊行されたその「著作集」で紹介されている伝説がある。即ち、現横浜市戸塚区柏尾町に伝わるもので、四つ杭の地の「護良親王首洗井戸」で鎌倉から南の方

が持ち来った親王の御首を洗い清め、供養したのち京に向かったという。

後に近くに宮を建て祀ったのが「王子神社」である。神社には建武中興六百五十年に当たる昭和六十年に、地元有志によって「大塔村」から運んだ岩をくり抜いた手水鉢とその舎をこれまた「大塔村」から取り寄せた吉野檜で建て、その由来を刻んだ石碑が立っている。

斯くの通り、相模原の人々は、我らが地頭の淵辺義博様が親王を弑殺する筈はないと生存伝説を作り上げ、また、殺されたのは史実としてその御首を抱いて京まで帰ろうとした南の方の悲痛な最期を美化しようとした人々の気持ちを後世まで伝えようとした伝説も理解しようと思う。

以 上